

インド～帰国

玄奘が遂にインドの境に入ったのは貞観2年(628)の冬頃であった。今から1400年もの前の話である。以下、玄奘が訪れた国々の殆どは、今はすでに廃墟となっているか消滅している。帝国書院の最新「基本地図」にはもう記載されていないところが多い。ただひたすらに足跡を追うだけである。

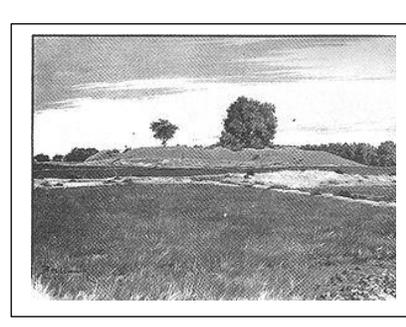
真先に訪れたのは**ランバ国**、続いて山中を行くこと500余里で**ガンダーラ国**に達した。東境にはインダス川が流れ、都を**ペシャワール**(現存する都市:中村哲医師の自給自足の農村の回復と農業、名前は知っている人は多かろう)と言った。アレクサンダー大王の遠征以来、ギリシャ系文化の中心となり、ガンダーラ美術を生んだことは知られているが、玄奘が訪れた頃は、国は衰え、王家もあとを絶ち、カピシャ国の属領となっていた。インダス河を渡り、さらに東南150里でウダカ・カンダという繁華な町、インダス河を南に渡った。その辺の河幅は34里、流れは清らかであった。**ガンダーラ国**:現在のパキスタン北西部に存在、紀元前1世紀～5世紀には仏教を信奉していた。インダス文明の発祥地。ガンダーラ美術が花開いていた。



インダス河上流



カシミール



ペシャワール (カニシカ王のストバー)

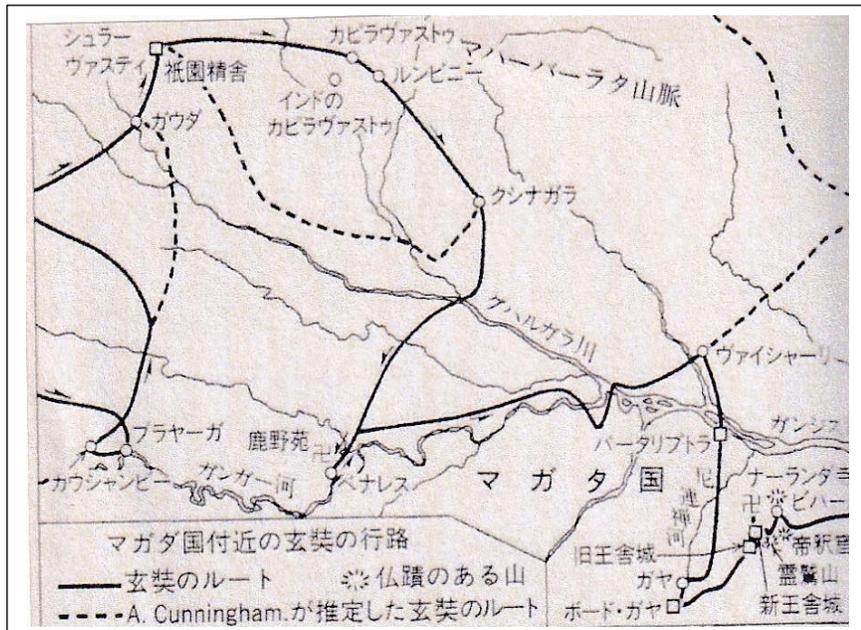
次いでタクシ国に着きさらに北へ進み、またインダスを越えると大きな石門があった。さらに東南行500余里でウラス、またさらに東南、険しい山道を行き、鉄線橋を越えて行くこと1000余里で**カシミール国**に着いた。王城内には寺が100余か所、僧侶5,000余人、アショカ王の建てた塔は四つもあって、そのどれもが仏陀の舍利(遺骨)が納めてあった。仏滅後600年、ガンダーラに都をつくったカニシカ王は500人近い学者を集めて仏教の教典を編集し、その注釈をつくらしていた。玄奘もこれに加わり、ここに2年間滞在した。

やがて再び旅路つき**マティプラ国**に入り、晩春から夏にかけて滞在、北に300余里で**ブラフマプラ国**に着いた。北の空にはヒマラヤが線を描いていた。東南に路をとって、1100余里で**ヴィラシャーナ国**に入る。この辺の住民は仏法を尊重せず、アショカ王の建てた百余尺の塔も崩れていた。それより東南に400余里で**カニヤータブジャ国**があった。カニヤータブジャとは腰の曲がった女達の町の意味で人々の容貌も上品で美しかった。玄奘はこの都に3ヵ月滞在し、高僧から教えを受けた。

カニヤータブジャ国を出て東南に1600里、盗賊に遭い命を落とす危険もあったが、**プラーガ国**に着いた。気候も良く学芸が盛んであるが、住民は概ねヒンズー教徒で、仏寺は二つしかなかった。これから先、西南に進むと大森林で猛獣や野生の像の棲みかである。その中を幾度か肝を冷やしながら進むこと500里余**カウシャーンビー国**に辿り着いた。仏寺10余か所あったが、皆、見る影もなく荒れ果てていた。これより密林中を東北に880里、**ヴィシヤカ国**に入った。その昔、釈迦が6年間法を説かれた所といわれ、その場所に高さ67尺の珍しい木があった。釈迦が歯を捨てたものが育ったといわれる。

さらにこれより東北500里で、**コーサラ国**の舎衛城、**祇園精舎**があったところである。釈迦がたびたびこの地に滞在したことはよく知られている。玄奘が訪れたときは見る影もなく荒れ果てていた。舎衛城から東南500余里で

釈迦の故郷カピラヴァスト国である。来てみれば舍衛城より更に荒れ果て見る影もなかった。玄奘は釈迦の伝説の地を巡礼しながら箭泉（病人にその水を飲ませ、遠方の人はその泥を持ちかえって患部に塗る）へ行った。その後、箭泉の東北89里のルンビニの森へ行った。釈迦族の水浴の場所で清らかな池、草花が咲き乱れていた。無憂花樹があり、そこそ釈迦降誕の地点であった。またその辺りにはアショカ王が建てた大石柱があった。



上 祇園精舎跡 下2枚 サルナート

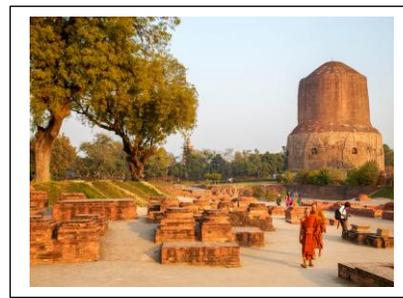


サ

無憂花樹



クシナガラの涅槃堂



ルンビニから密林や荒野を抜けて 200 余里でラーマ国に着いたが廃墟だった。さらに東方へ、釈迦入寂の地を訪れようと東北に向かい、密林中を数百里、恐ろしい山牛や野像が横行し、軍盗や獵師達が待ち受けて襲った。やっと、無事にクシナガラ国、さらに密林中を南に 500 余里ほど旅してサルナート（鹿野苑）に着いた。この地は 35 歳で釈迦牟尼（仏陀）が初めて教えを説いたとされる地であるが仏法はすでに衰えていた。鹿野苑から東に下ること 450 余里、ヘカンガ河を渡ってヴァイシャリー国に至った。国の周囲 5 千余里、土地は肥えてマンゴーやバナナが多かった。都城は荒れはて、今では住民は少ない。この地で釈迦は死期が迫ったことを悟ったという。ヴァイシャリー国の南境のガンガ河を渡るとマガタ国、周囲 5 千余里、諸河の合流するところにパトナという町、アショカ王の都の跡。インドで最も完全な形で残っているアショカ王塔があった。玄奘はこの地に 7 日間滞在し、途を西南にとって 300 余里、ティラチャーカ寺（画像なし）という大伽藍が現在でも見られる。10 日目にナーランダ寺から 4 人の僧侶が迎えに来た。（左下：ナーランダ寺）



ナーランダ寺は、当時のインドで他に比肩するもののない権威の大学であった。玄奘は、ここで貞観 4 年（640）初秋、29 歳のときから同 9 年、34 歳まで戒賢法師等に学んだ。そして、戒賢からもう教わることはない。

人の命は露のようにはかないのでここで帰国してはどうか、と勧められた。しかし、東、南、西のインドはまだ見ていないから、これらを巡り来たときの途を逆に帰ろうと決意して旅に出たとされるが、真の事情はよく分らない。

ナンラダから**カンガ河**（ガンジス川のこと、ヒンズー教にとって最も神聖な川とされる。全長 2525 km）を下り 2 カ国をへて 500 里余、**イーラナパルヴァタ国**に着いた。二人の名僧がおり一年間滞在して学んだ。貞観 10 年、35 歳の春を迎えた。次いでガンガ河の南岸 300 余里東に下って**チャンパー国**、国の南境には 200 里にわたる大密林があり、野象が数百頭ずつ大群をなし横行、犀、黒豹、山犬など多くて近づけなかった。ここから 3 カ国 1900 里、南に旅して**サマタタ国**。（今のガンジスのデルタ地帯）に出た。住民の身の丈は低く、皮膚は黒く性質は激しかった。僧徒は 2,000 余人。穀物の豊かな暖地であった。デルタ地帯を西南に下って**タンマリッティ国**に着いた。往時はシナ、ジャワなど東方諸国との交通の基点であった。そこから海路で**スイハラ国（セイロン）**があって小乗仏教を奉じていると聞き、そこまで行こうという心持になったが、しかし海上は危険であり、陸路を南インドの東南角まで行けば、船旅 3 日でスイハラ国に行けると聞き、陸路を西南に進んで**ウッタ国**に向かった。ウッタ国は土地は肥え、住民は体格が大きく風俗は荒々しいが、好学の風があり仏教は盛んであった。密林中を西南に進んで大ジャングルの間を 1450 里も辿って**カリンガ国**に入った。同国は**東ガーツ山脈（左下図）**とベンガル湾に挟まれた細長い地域である。暑熱厳しく、風俗は荒々しく性格は熱情的である。アショカ王が建てた塔があった。



玄奘はここから西北に転じ、1800 余里先の**ダクスィナ・コーサラ国**へ赴いた。玄奘はここに一月滞りし、因明学に通じた波羅門から集量論を学んだ。ここから大森林の中を東南に 900 里進んで**アンドラ国**、さらに南へ進んで**ダナカタカ国**に入った。人口は希薄で荒地も多いが学芸を好む。往時は多数の寺があったが、多くは荒廃し僅か 20 余のみ。これより西南に 1000 余里で**チョールヤ国**に到った。密林が多く、住民は少なく、群盗の横行する恐ろしい国であった。南に 1560 里で**ドラヴィック国**の都**カーンチープラ**に

着いた。ここは南海への門戸で玄奘学の主目的であったセイロンまで水路僅かに 3 日である。渡航準備をしていた



が、かの地の高僧ら 300 人ほどが避難していたのである。王が死んで乱が起り飢饉に見舞われ高僧はいないとのことであった。ついにセイロン行は断念し、ここから西海岸を廻って帰路に着くことにした。

左：カーンチンプラの寺院

（ここから先、デカン高原を西北に斜断して西海岸に向かったとされるが、疑義が多いとされる学者が多いので割愛する）

貞観 9 年（西暦 635）にナーランダ寺を出た玄奘が再び**マガタ国**に戻ったのは、貞観 11 年。戒賢老子も健在でその帰りを喜んでくれた。旧友と旅の土産話に時の移るのを忘れた。玄奘が帰国の途に着いたのは、貞観 15 年（641）の秋、そのとき 40 歳になっていた。往路で訪れた**カピタ**などの数カ国を経て**ヴディーヤーナ国**に着いた。この地に 2 ヶ月滞在したのち、数カ国を経て西行 20 日余りで**スインプラ国**、これから先、20 日余りの行程は山や谷の間を行くので盗賊が多かった。北インドの国々へ帰る僧侶 100 余人が経典や仏像などを持って玄奘に同行していた。賊徒は度々現れたが何の危害も加えなかった。貞観 16 年（642）の初め、インダス河に出た。中流で舟が転覆しそうなり貴重な経典 50 冊などを失った。対岸の**カピシャ**国王が出迎え、城内に 50 余日滞在、何よりも経典が惜しまれ、人を**ヴディーヤーナ国**にやって、そのの仏典を写させることにした。

その後、カピシャ国王と同行して西北に進むこと一月余りで**ランバ国**に入った。国王は 75 日間の無遮大施を行って玄奘に敬意を示した。ランバから南に 15 日行程の所に**ヴァラナ国**（現在のアフガニスタン国内）があった。**カピシャ**国の属国で数十の寺があることを聞いていたので、玄奘はわざわざ赴いたが、多くは荒廃していた。

それから玄奘は途を西北に撮り、釈迦牟尼の国に別れを告げた。高山を越え、大河を渡り、2000余里を経た。今のアフガニスタンの首都カブール辺りを過ぎ、さらに東に向かってカビシヤの国境まで国王が100人余の従者をつけてくれ雪山（ヒンドゥークシュ山脈）越えの険路を護送させ、食料や家畜の飼料など整えてくれた。一つの高嶺まで登りつめるに7日間要した。



←ヒンドゥークシュ山脈

さらに東に向かってカビシヤの国境まで国王が100人余の従者をつけてくれ雪山（ヒンドゥークシュ山脈）越えの険路を護送させ、食料や家畜の飼料など整えてくれた。（玄奘が越えた峠はカワク峠とされるが画像なし）一つの高嶺まで登りつめるに7日間要した。これから先、玄奘と共にしたのは7人の僧と20余人の雇人であった。それに象一頭、騾馬十頭、馬四頭を連れ、終日、

氷結した谷間を切りながら進んだ。高嶺の向こう側に下ると、前途にもう一つの嶺が立ちふさがっていた。近づくとも真白な岩山であった。日没のころ、絶頂に達した。寒風が吹き、直立するのも困難であった。それから五六日後、**ア****ン****ダ****ラ****ブ****国**、さらに先、700里、行き来がけにも滞在した**活****国**であった。往路、高昌国に3カ年留まるといふ高昌国王との約束を履行しようとしたが、すでに国王はおろか国さえも無くなっていることを知った。

活国を出発したのは貞観17年（643）の初めてで、玄奘が42歳にときと推定されている。その後、同じ方向を志す隊商と東に向かって行くこと山路を300余里で**ヒマタラ****国**、住民の多くはフェルトの天幕小屋に住み、遊牧民の生活を送っていた。それより東に200余里で**パ****ー****タ****ス****タ****ー****ナ****国**、住民は学芸も礼節も知らず、見るからに粗野であったが、雪は深く、厳冬のため前進が困難のため、気候が緩むのをまって一か月余り滞在した。再び山中を進むこと1000里余で**ク****ラ****ナ****国**、住民は荒々しく仏教を信ずる者は僅かであった。さらに東北に500里で**ダ****マ****ス****テ****ィ****テ****ィ****国**、住民は碧い眼をしたアリアン系の容貌、礼儀を知らず、みすぼらしい風采であった。その後、東に進み**パ****ミ****ル****溪****谷**に出た。彼は西遊記に「この溪谷は東西千余里、南北100余里、狭い所は十里足らず、雪山が塀のようにめぐっている。寒風は凄まじく、春も夏も雪が舞い、昼となく夜となく風が吹きすさんでいる。全く住民の跡を絶った死の谷である」と書いている。



パミル溪谷



パミル溪谷



ホータン（現在）

パミル溪谷から東に無人の山中、氷雪を行くこと500余里で**カ****バ****ン****ダ****国**に着いた。国王は熱心な仏教信者で好学の人で、この地に20日余り滞在した後東北に向かったが、5日目に強盗に遭った。同行した商人達は恐れ逃げてしまうということがあった。吹雪は荒れすさび、道は険しく困難を極めたが、やっと800里を踏破して**ウ****シ****ャ****国**（現在の**新****ギ****省**）、ここから北に砂丘が連続した不毛地500余里で**カ****ー****シ****ュ****ガ****ル****国**に着いた。この地では子供が生まれると頭を圧して扁平にする習慣があった。そこから東、山を越えて谷を渡って行くこと1300余里で**ク****ス****タ****ナ****国**（現在の**ホ****ー****タ****ン**）に着いた。国土の大部分は砂漠で、耕作可能のオアシスは一部に過ぎないが、泉地は肥沃で多数の果物を産し、毛織物、絹織物等の家内工業が盛んであった。さすが西域第一の文化国と言われるだけあって、住民は礼儀を知り、学芸を好み、生活も豊で寺は100余り、僧は5,000余人と言われ大乘を尊んでいた。玄奘が国境の町まで着くとホータン王は親しく、そこまで出迎え歓迎され、玄奘は相当長く滞在することにし、インダス河の渡しに流失した経典を補うため、人をやって探させた。また十余年前、国法を破って出境したため、このまま帰国することは出来

ない。あらかじめ唐の天子の許しを請う必要があった。それで上表文をつくり、使者を隊商に加えてもらい長安に行ってもらった。7～8か月後、使者が戻って来て唐の天子の言葉を伝えた。「師が真理の道を異域に求め、いま帰国されると聞き、歓喜無量である。速く来て朕と会われよ。ホータンその他沿道の国々に勅令を下して、師を送り、人夫、乗物など不自由のないようにする。また敦煌の役人には流砂まで、ローランの役人にはソマまで出迎えるよう命じておいた」という温情のこもったものであった。ホータンから東に300余里先東方には大流砂が展開していた。その名の如く風につれて砂丘が移動し続け、前に通った人の跡もなく進路も定め難い。水は乏しく熱風は吹きすさび、旅人は精神錯乱に陥って、あらぬ方に迷い命を失うのであった。こういう境を行くこと400余里でトカーラ国の跡に出た。そこはただ空しい死の国であった。



ロブノール 空中写真



敦煌 莫高窟



沙州 古城

さらに東に進むこと600余里でチャマダナ国の跡、死の都市であった。これより東北千余里、動く湖として名高いロブノール湖畔のローラン、玄奘が通過した頃は廃墟となっていた。ローランから一路沙州へ向かった。18年前に苦心して脱出した思い出深い所である。貞観18年(644年)11月頃と推定される。26歳のとき、ここを去り43歳で帰ったのである。(ここから先の記述はなく一気に長安となっている)

貞観19年の正月、長安に通ずる漕梁を急いで来る一隻の舟があった。この運河は都の西南30里の長安城内に通じていた。その舟に山のような荷物が載せられていた。船着場は駆けつけた群衆で大変だった。正月8日、朱雀門の南でインドからもたらした。経典や仏像を陳列して衆に示した。その月23日には洛陽に赴き、天子に拝謁した。帝から労いの言葉があった。その後の偉業は略すが、664年、玄奘は63歳で亡くなった。

参考図書：玄奘三蔵 西域・インド紀行 長澤和俊訳 講談社学術文庫
玄奘三蔵 史実西遊記 前島信次 岩波新書
挿入写真はいずれも無料画像によった。